

恋人はスナイパー <偽りと隠された真実>

作: ウッチャン大好きっ子

\* < > で閉じられている会話は、中国語での会話になります。

新キャラ

今回は居ません。

解説 (既に存在する言葉について)

1. 青龍刀…『恋スナ』シリーズに登場する刃物の中でもっともポピュラーは武器です。

有名なシーンとしては『2』で范はきなこを倉庫に呼び出し、閉じ込めた後に出てきた敵が持っていた刀が青龍刀です。

青龍刀は、中国の刀を総称でもあります。

基本として片刃の柳の葉のような長く膨らみのある刃の形をしている刀です。

解説 (私が作ったオリジナルの言葉について)

1. ダイブ…精神世界、電子世界など事実世界とは異なる空間に入る(侵入する)事です。

2. 黒牙(こくが)…”7”のおまけとイラストに出ていましたが、龍牙の愛用の武器です。

全長280cm、刃幅最高30cm、刃身150cmで黒い両刃と長い槍のような柄を持つ大矛です。

かなり馬鹿でかい武器であり、龍牙の人間離れした力でなければ使いこなす事が出来ない武器です。

～第59章～ <出来る事と出来ない事>

床に横になる凱歌と龍牙の体を三人は静かに祈るような眼差しで見守っていた。

「そろそろ、きなこさんを起こしますか？このまま待っているよりは例の計画をやった方がいいだろう。」

と天山は二人に力が入っていない弱い声で言った。

「そうですね。無理かもしれませんが試す価値はあると思います。じゃあ、準備しますね。」と蒼凱は二人を繋ぐ”命のケーブル”にある箱を操作し始めた。

天山は蒼凱の話を聞き終えるとゆっくりと立ち上がり、気を失い壁にもたれ掛かっているきなこの元に静かに歩み寄った。

「じゃあ少し荒っぽいですけど行きますよ。」と天山はきなこの後ろに回り、両手を横に伸ばす様に持つといきよい良く背を衝撃を与えた。

少しうめき声のような小声もれた後、静かにきなこは目を開けた。

それを確認するとまだ力が入らないきなこの体を支えながら天山は優しく話し掛けた。

「こんな事を私から言うのもおかしいのですが…。大丈夫ですか？」と天山は申し訳なさそうに言った。

徐々に意識がはっきりしてきたきなこは慌てて凱歌のいる方を見た。

そこには凱歌と龍牙が横になっていた。

「きなこさんが気を失っている間に龍牙が凱歌の中に”ダイブ”しました。つまり侵入しました。

きなこさんにはやって頂きたい事があります。というか、我々にはそれしか龍冴を手助けする方法が無いんです…。立てますか？説明をしますからこちらへ。」と天山は言うと、きなこを支えながら立つと横になっている二人の元にきなこを導いた。

「見てなんとなく分かると思いますが、二人はこの”命のケーブル”と言っていい、一本のケーブルで繋がっています。これが龍冴を凱歌の精神内、つまり心の中に行く道となっています。

今これを切れば、確実に龍冴という人格がこの体から消えます。ですが、この龍冴の脳とケーブルを使えば、我々も凱歌の精神内に行く事が出来る。

但しそれは非常に限られた時間であり、自由に行動出来る保証はありません。

下手をしたら一言、二言話すのがやっとの可能性が高い…。そこできなこさん、貴方にしか出来ない事があります。

我々三人の誰かがその限られた時間で出来る事を考えると何も無い。何の役にも立てない…。

ですが、短時間で凱歌の意志に影響を与えられる人間が、この世に恐らく二人居ます。

それは…。きなこさん、貴方と凱歌の母、市江さんだけだと考えられます。

しかし、市江さんは心臓病の件もありますし、時間的にも難しい。つまり、可能なのはきなこさんだけです。

そこでやってもらいたい事ですが、龍冴を経由して凱歌の中に行って頂けませんか？

もちろん、危険が無いとは言いません。良く考えて決めて下さい。ただ、戻って来れないという可能性はありませんが、入れないという可能性があります。龍冴の脳を一度経由する為、こちらできなこさんの意志の伝達を操作出来ますから、戻る事は出来ます。

しかし入るのは龍冴の状況次第ですが、あまりにも情報量が多過ぎて、きなこさんの情報を受け付けられない可能性があります。」と天山は苦々しい表情を浮かべながらきなこに説明した。

しばらく黙っていると、龍冴の体が反応した。全員が突然の反応に戸惑い、龍冴を見つめた…。

## ～第60章～ <人殺し同士>

### - 凱歌の精神世界 -

龍冴と禍悪主は立ち尽くす”人間・凱歌”を守る様に立ち塞がる狂気に満ち満ちた”スナイパー・凱歌”と睨み合っていた。

「”まがい物”が何を仕掛けて無駄だ。大人しく俺の祝いの生贄になれ！」と”スナイパー・凱歌”が二人に向かって走り込んで来た。

「じゃあ、行きますか。」と龍冴は軽い感じで禍悪主の顔を見ながら言った。

「そうだな。こいつは俺様が預かる。お前はさっさとあの青二才を叩き起こせ。

いくら俺様でも防戦一方という戦い方は初めてだし、相手は本気。この差は大きい。」と禍悪主が冷たい感じで言い終えると、間合いを計りつつ、同時に走り出した。

龍冴は左側から、禍悪主は右側から”スナイパー・凱歌”に向かって走り出した。

「行かせるか！」と”スナイパー・凱歌”は龍冴を止めようと拳を繰り出した。

「お前の相手は俺様だ！」と禍悪主は龍冴に向けられ繰り出された拳を受け止めながら言った。

「さっさと行け！こいつは俺様が止める！」と禍悪主は荒々しく言うと、”スナイパー・凱歌”の左肩に手を掛けると押さえている右拳と共に力づくで龍冴と”人間・凱歌”から突き離す様に飛ばした。

「さっきは言っていたな～。”まがい物”と…。確かに俺様達は、”偽りの作られた存在”…。

だがな、俺様達は生きている。お前とは違ってな。

生きるっというのは簡単じゃねえんだよ！お前が思っている以上に！」と禍悪主は冷淡に言うと突き飛ばした”スナイパー・凱歌”に向かって走り出した。

”紅き死神・禍悪主”と”黒き夜叉”である”スナイパー・凱歌”の壮絶なる攻防が始まった。

その拳、蹴りが飛び交った嵐の中、龍牙は”人間・凱歌”の元に辿り着いた。

「凱歌、しっかりしろ！自分を持て！己の闇に飲まれてはならない！

ここはお前の心の中であり、お前の迷いが作り上げた世界のようなものだ。

しっかりと自分を見るんだ！自分の暗い部分を！このままだと、夜叉に全てを奪われるぞ。身も心も。それだけじゃない。奴はお前から大切なものを全て奪う。そう、お前のかげがえの無い大切な人の命も。

奴にとって凱歌、お前が大切なものはもっとも嫌いでおぞましい天敵のようなものでしかない！

それを止められるのは俺や禍悪主じゃない！お前自身なんだ！」と龍牙が悲痛な叫びにも似た声で訴えた。

しかし、”人間・凱歌”は光を失った瞳のまま立ち尽くすばかりだった。その後も龍牙は続けて必死に訴え続けたが効果が全くなかった…。龍牙が諦めの思いが出てきた時、禍悪主の声が響いた。

「なに勝手に諦めてんだ！俺様だっていつまでも我慢出来ないぞ！

さっさとしねえとこいつ、ぶっ殺しちまうぞ！」と禍悪主は怒鳴った。

「誰をぶっ殺すだって。」と”スナイパー・凱歌”は言うなり攻撃パターンを変え、禍悪主の鳩尾に正拳突きを食らわせた。

「くっ！」と禍悪主は突然攻撃変化に、正拳突きをもろに食らってしまった。

禍悪主の口から血がすーっと一滴滴れた。

「なかなかやるじゃねえか…。」と禍悪主は左手の親指で口から流れる血を拭いながら嬉しそうに言った。

～第61章～＜心と体＞

- 現実世界 -

龍牙の初めの反応から数分様子を見てみると、突然攻撃を受けたような反応の後、静かに龍牙の口から血が滴れた。

更にその姿を見ているその場に居た四人は動揺した。何もしていないのに龍牙の体にみるみる傷が出来始めた。

「一体どうなっているの！？」ときなこは慌てたが、そばに居る三人は思いを巡らせていた。

「これは精神世界でのダメージが現実世界にある肉体にまで影響を与えているんだ。

一体何が起きているのか調べないときなこを送り出す事すら出来ない…。」と天山が腕を組んだまま言った。その時、蒼凱が何かに気が付いたかの様に慌ててケーブルの途中の箱を確認するや、新たにケーブルを用意し始めた。

「一体どうしたんだ？」と天山が忙しく動き回る蒼凱を目で追いながら訊いた。

「凱歌の精神世界に送られている龍牙の脳波をコンピューターで分析すれば、龍牙の行動を映像化出来る可能性があります。今、メインコンピューターに接続しますから、少し待ってください。」

と蒼凱は端末に箱から出ているケーブルを繋ぎながら説明した。

そして、端末のキーボードを操作し、セッティングを進めた。

「セッティング出来ました。今、立体映像化しますよ。」と蒼凱が手の平大のホログラム発生装置を

全員の見える所に置きながら言った。

蒼凱がキーボードの”Enter”を押した。しかし、エラーを起こしてしまった。

「あれ！？どうしたんだ・・・。」と蒼凱が確認をしていると、プロフェッサーが近づいてくるやあっさりした声で言った。

「これは、別々の脳波が二つ存在しているから映像化出来ないんじゃ。

これでも長年龍冴を研究してきたからな。で、つまり・・・。」とプロフェッサーは話を止めてしまった。

「禍悪主も凱歌の精神世界にいるという事か。」と天山は考え込んだ感じで言った。

「そういう事になる。蒼凱、脳波を分析し二つに分けてから映像化するんじゃ。わしも手伝う。

すぐに出来ると思う。」とプロフェッサーは言うのと蒼凱の隣に座り、キーボードを叩き始めた。

数分しない内に準備は整った。

「これで二つの脳波を分けて映像化出来るはずじゃ。ただ龍冴の脳波しかないの状況がよく分からないかもしれないがな・・・。じゃあ、まず動き回っている方から映像化するぞ。」と心配そうに

プロフェッサーは言って”Enter”を押した。

すると、ホログラム発生装置が起動し龍冴の映像が立体映像で映し出された。

それは一方的に攻撃を受けているような格好で、防御と回避を繰り返すような動作をしていた。

「これは龍冴ではなく、禍悪主の様だな。しかし、なぜ攻撃をしないで防戦一方なんじゃ・・・。

もうひとつの方にするぞ。」とプロフェッサーは言った。

次に両手で誰かの肩を掴む格好で話し掛けるような龍冴の姿が映し出された。

「一体何が起きているんだ・・・。しかし、話し掛けている方が龍冴じゃろう。

話し掛けている相手は恐らく凱歌だと思う・・・。そして禍悪主が相手をしているのは、夜叉だと思うが確信は無い。

しかし、これできなこさんの脳波を、龍冴の脳波に乗せる事で凱歌の意志のそばに行ける事が

分かった。きなこさん、準備を始めよう。蒼凱にシステムを変更してもらう間に、説明する。」と

プロフェッサーが話していると、龍冴が衝撃を受けた。

蒼凱が素早く映像を切り替えた。そこには一方的に押される禍悪主が映し出された。

全員が『急がなければ』と強く感じた。

## ～ 第62章 ～ < 形 >

### - 精神世界 -

「まだかよ龍冴！俺様だっていい加減にしないと攻撃しちまうぞ！」と禍悪主が”スナイパー・凱歌”の攻撃を回避しながら龍冴に怒鳴った。

「分かってる！でも、どうしようもないんだ！少しずつ反応はあるんだけど。」と焦りを秘めた声で龍冴は答えた。その時、一瞬の油断が禍悪主に生まれてしまった・・・。

グッと禍悪主の体が宙に浮かんだ。

「凱歌を傷付けまいと攻撃をしなかったが、攻撃しても俺には効かない。そして、その傷付けまいという行動が、弱さとなって自分を殺すのだ！」と”スナイパー・凱歌”は右手で禍悪主の首を掴み2 m ほどの高さまで上げながら言った。

禍悪主は首を締められ抵抗するが、迷い、ためらいから強く抵抗出来なかった。

「禍悪主！」と龍冴が振り返った瞬間、”スナイパー・凱歌”の左手が伸び、龍冴の首を捕らえた。

そして、龍冴を禍悪主の隣まで持ち上げたまま引っ張ってきた。

「そう驚くなよ。この世界では心次第で何でも出来る。元の形にこだわる事はない。こんな風に。」

と”スナイパー・凱歌”は淡々と言うとその背中から腕が現れた。

その手には、”ステアAUG”が握られていた。

「さあ、俺が生まれ出でる祝いの生贄となれ！」と”スナイパー・凱歌”はそう言う二人を押さえている手に力を込めた。二人は「ぐっ！」と苦しみ悶えた。

そんな二人を愉しそうに見ながら背中に現れた三本目の腕に握られる”ステアAUG”の銃口が静かに二人に向けられて行った。

#### - 現実世界 -

三人は焦りを感じながら急いで準備をしていると、龍牙の体が激しく動いた。

その首には、手跡に似た青あざが出来始めたのにきなこが気が付いた。

「プロフェッサー！龍牙の首に！」ときなこが大声を上げるや全員がホログラム装置に見をやる。

そこには持ち上げられているような格好で並ぶ龍牙と禍悪主が映っていた。

「プロフェッサー。このままだときなこを送り出すどころか、二人とも死んでしまう！相手が見えない以上、どうにもならない…。くっ。せめて凱歌の脳波がもっと強くなってくれば…。」と蒼凱が言う。

プロフェッサーが動じる事無く考えていると、突然何かに気が付いたような反応の後、何か準備を始めた。

「どうしたんですか！？」と蒼凱が訊くと、「凱歌の脳波に変化が起きとる。それも龍牙と同じ様な反応が！」とプロフェッサーは怒鳴った。蒼凱と天山の表情が明らかに変わった。

それは最悪のシナリオに向かっている事を物語っているかの様だった。

プロフェッサーは二人の反応を気にしつつ、プログラムの改ざんをしていた。

「どうしたんですか？龍牙さんと同じ反応がホイさんに起きているって！？」ときなこが表情が変わった二人に問い掛けた瞬間、反応が…。

凱歌の体が反応を示した。それは右手を払われるような格好だった。映像を見ると…。

#### - 精神世界 -

龍牙と禍悪主の二人は互いに向けられる”ステア”を見ながら、顔を向け合うと意を決めた様に頷き合った。その瞬間、禍悪主が行動を起こした。

禍悪主の首を押さえていた右手を両手で握ると気合を入れた。”スナイパー・凱歌”の右手が耳障りな音を上げた。

それに伴い禍悪主の体が解き放たれた。その衝撃で三本目の腕が消えた。

素早く着地すると、龍牙を押さえる左手を蹴り払い、龍牙を解放した。

「龍牙！お前は凱歌の元に行け！」と禍悪主は首を押さえながら着地した龍牙に怒鳴った。

「でも。」と龍牙がためらうと、禍悪主は「こいつは俺様が何とかする！それより当初の目的を忘れるな！」と背を向けたまま言った。

その背中から放つ思いを感じ、龍牙は”人間・凱歌”の元に走った。

走り出したのを感じると禍悪主は”スナイパー・凱歌”を今までに無い殺意に満ちた瞳で睨み付けた。

「いや～。驚いたな。攻撃しないと高を括っていましたよ。でも、この程度では無意味です。」と禍悪主に睨まれた”スナイパー・凱歌”は怯む事無く言うと、禍悪主に握り潰された右手が元に戻った。「やっぱり傷を消す事も可能か…。だがこれでハッキリした。」

お前がここでは俺様達が不利だと言っていた理由がな。わざわざ”人である必要など、どこにも無い”という事だな。」と禍悪主は確信と余裕に満ちた声で言った。

その言葉に龍牙は戸惑いを持った。

『人である必要がない！？』と龍牙は思ったが今は禍悪主を信じ、見ているしかなかった。

そして、禍悪主の言葉に戸惑いを持ったのは龍牙だけではなかった。”スナイパー・凱歌”も動揺した様だった。

「トリックに気付き、頭で理解したとしても、それを行なう事は貴様達には出来ない！」と

”スナイパー・凱歌”は言った。

### ～第63章～＜力の正体＞

「あのお人よしなら無理かもしれんが俺様は違う。俺様の今存在する場所は、貴様と同じ精神世界なものでね～。」と禍悪主と意味ありげに言い放つと”スナイパー・凱歌”に向かって走り出した。

”スナイパー・凱歌”はその禍悪主の言葉に意味が理解出来なかった。

そして、先程までの時間稼ぎ的な行動とは全く違う、積極的な攻撃体制を取る禍悪主に動じた。

禍悪主はためらい無く、正拳突きを繰り出し先制した。

”スナイパー・凱歌”はその攻撃を慌てて避けるが、不安定な体制を立て直す間を与えず禍悪主は連続攻撃を繰り出した。

攻撃を防御しつつ危険を感じた”スナイパー・凱歌”は、間合いを取る為に飛び退けたが禍悪主はそれさせないと左手を振った。

その左腕は鞭の様にしなり、そして先程の”スナイパー・凱歌”の手の様に伸び、”スナイパー・凱歌”の右足を捕らえた。

その左腕の動きに”スナイパー・凱歌”も龍牙も驚いた。

「そんな馬鹿な・・・！」”現実世界の人格”が出来るはずが無い！」と”スナイパー・凱歌”は明らかに動揺した声で言った。

「”現実世界の人格”だったならな。言ったはずだ・・・。俺様の存在する場所は精神世界と！

このような事、理解してしまえばするのは簡単だ。大体の事を見ただけで完璧に出来る俺様にとって容易い事。さあ、お前が見てくれた事をやってやるよ！」と禍悪主は言う”スナイパー・凱歌”を伸縮能力を最大に使い、強く叩き付けた。

”スナイパー・凱歌”が叩き付けられた衝撃で動きを止めたがそれを確認する事もせず、禍悪主は捕らえていた左腕を離した。

そして右手に意識を集中させた。すると突然”ステアー AUG”が姿を現し、禍悪主は静かに掴み構えた。

静かに、起き上がったばかりの”スナイパー・凱歌”に銃口を向けた。

「貴様がなぜ怪我を消せるか、腕を伸ばしたり、作り出したりする事が出来るか。それは、ここが精神世界つまり夢の中と同じ様な所だからだ。怪我は、受けていないと根底から否定し、受け入れなければ現実世界にある肉体も、ここでも影響が出ない。

そして俺様や貴様が簡単に”ステアー AUG”を具体化する事が出来るのは、こいつを愛用している事で正確な情報を持っているからだ。なによりここで人の姿をしている必要はない。

敢えてここで人の姿を取っているのは、俺様達の固定観念がしているものだ。

ここでの戦いで勝利するには、いかに自分を保ちつつ固定観念を捨て、相手にダメージを実感させるか。そして正確な記憶と想像力をどれだけ駆使するかだ。違うかな？”スナイパー・凱歌”。」

と殺意を押し殺したような、いたぶる事を楽しむような声で禍悪主が言った。

”スナイパー・凱歌”は悔しげな表情をしたが無言で睨んできた。

その時、禍悪主の体が揺らいた。禍悪主が動揺した一瞬を”スナイパー・凱歌”は見逃さなかった。

素早く禍悪主の持つ”ステアーAUG”を蹴り飛ばすと距離を取ろうとしたが、  
禍悪主はためらう事無く”ステアーAUG”の引き金を引いた。正確に両足を撃ち抜いたが一瞬にして  
傷が無くなってしまった。

禍悪主は舌打ちをすると”ステアーAUG”を放り出した。”ステアーAUG”は主から離れると煙の様に  
消えてしまった。

「これが固定観念を捨てた奴の戦い方だ。」と禍悪主は怒鳴ると走り出した。しかし、そこには人の型と  
は異なるものが居た。

”スナイパー・凱歌”に向かって走っていたのは、人並みの大きさの”紅毛の狼”だった。

”紅毛の狼”はその鋭い牙を見せ付けながら、”スナイパー・凱歌”の懐に走り込んだ。そしてその牙を  
首筋に向けた。”スナイパー・凱歌”は咄嗟に左腕で防ごうとした。

”紅毛の狼”はその左腕に鋭い牙を食い込ませた。そのまま振り回し投げ飛ばした。

”スナイパー・凱歌”は投げられたものの左腕をかばいながら着地した。そして”紅毛の狼”は姿を変え、  
人の姿になった。

「これが自分を保ちつつ、固定観念を捨てれば出来る事だ。驚きのあまり傷が癒えてないぞ。」と  
禍悪主は悠々と言った。

- 現実世界 -

突然の凱歌の反応に映像の見たところには、禍悪主が凱歌の腕を握り潰した直後が映っていた。

プロフェッサーのプログラムの改ざんによって凱歌の姿が見れる様になっていた。

ただそこには奇怪な三本目の腕は見えてはいなかった。

きなこ達は龍牙達の声は聞こえないので何を言っているのかが気になって仕方が無かった。

その中で禍悪主が”ステアーAUG”を作り出したり、姿を変える時の脳波の変化にプロフェッサーが  
気が付いた。そしてその変化が龍牙の記憶、数々の情報を引き出して行なっている事を知った。

蒼凱とプロフェッサーは素早く準備を完了させて言った。

「きなこさん、今しかありません。ここを逃すと双方とも危険にさらされてしまうかもしれません。」と  
蒼凱が言った。きなこもこのままだと危険である事を理解して「分かりました。」と答えると、  
脳波探知用の端末を付けた。

「いいですか、これからきなこさんの脳波は増幅して龍牙の意思と重ねます。時間としては短いとは思いますが、出来るだけの事をして下さい。それでは、龍牙の手を握って祈る様にして下さい。」と  
蒼凱が説明した。きなこは言われるまま、そっと龍牙の左手を両手で握り祈った。

その瞬間、突然現れた新たな脳波に、龍牙達二人の脳波が不安定になった。

少しすると凱歌の左腕に噛まれたような傷が現れた。しかし、しばらくすると跡形も無く消えてしまった。

蒼凱達三人はきなこを心配させない為に、傷の事を言わずにいた。

そして、きなこの意志が遠のいていった。

～ 第64章 ～ < 勝利の女神 >

- 精神世界 -

禍悪主の悠然とした態度に”スナイパー・凱歌”は怒りを覚えた。その時、再び禍悪主の体が揺らいだ。しかし、禍悪主はまるで動じず、この揺らぎの正体を知っているような雰囲気を含みながら睨み付けた。龍牙は自分に何かが起こり始めている事に気付き、思いを巡らせていた。

そんな時、さっきの揺らぎが起きた。

その中である気配、思いを感じた。そして自分の左手に握られるような感覚を覚えた。

龍牙はその感覚等に全てを委ねる決心をした。全てを受け入れる様に、何も考えず静かに目を閉じた。

その瞬間、自分の中に誰かが入ってくるのを感じた。自分の中に溶けていく様だった。

睨み合う禍悪主は突然、笑い出した。

「お前の負けだ。”あの男女”が来たら、もはやお前に勝ち目は無い。残念だったな。無理して時間稼ぎをした甲斐があった様だ。」と禍悪主は悠然とした態度で言った。

「それはどういう意味・・・。」と問い掛ける最中に”スナイパー・凱歌”は言葉を失った。

禍悪主の後ろに居たはずの龍牙が姿が消え、”スナイパー・凱歌”がもっとも嫌う”あの女性”が光の中から姿を現し始めたからである。「なぜここに！？有り得ない・・・。」

だが、このままにしておく訳にはいかん！」と”人間・凱歌”の元に向かおうとした”スナイパー・凱歌”を禍悪主が押さえた。

「悪いが、折角の恋人との再会を邪魔するな。それにお前の相手は俺様だと言った筈だ！

この俺様に背を向ける気か！」と禍悪主は怒鳴ると”スナイパー・凱歌”を遠ざけた。

禍悪主は一瞬振り向くと、小さく「上手くやれよ。きなこ。」と今まで見た事もない優しい笑顔で言った。

”人間・凱歌”の隣、龍牙が居た場所に現れた光が静かに輝きを失い始めると次第に、その中に居る者の姿がハッキリしてきた。きなこは落ちていくような感覚に陥っていた。しかし、その感覚に恐怖は感じなかった。その先に龍牙を、凱歌を感じられたからである。強い光に入ってしまった。

静かにきなこは目を開けると、そこには呆然と立ち尽くす凱歌が居た。周囲を見渡すと、紅髪の龍牙が凱歌と戦っていた。それが禍悪主である事も理解した。戸惑っていると、殺意に満ちた凱歌を押さえながら禍悪主が怒鳴った。

「何ぼけっとしてやがる！さっさと凱歌を正気に戻しやがれ、男女！」と。

その言葉に自分が精神世界に入る事に成功した事を、目的を思い出させた。

「何よ！男女って！」ときなこは怒鳴り返したものの、それがきなこをしっかりさせる為にわざと言ったものと分かっていた。

そんな中で、きなこは禍悪主が戦っているのが、凱歌＝ホイの心の闇である夜叉である事に気が付いた。その禍々しい殺意を纏い、戦いを楽しんでいる姿に、本性は純粋で優しさを持つホイの心の傷、背負っているものの大きさ、重大さを見たような気がした。

きなこは今しなければならぬ事を再度思い出すと、立ち尽くす凱歌に真剣な眼差しを向いた。

そのきなこの姿を確認すると禍悪主は気合を入れ直し、”スナイパー・凱歌”をきなこに近づけない様に攻撃を繰り返し始めた。

「ホイさん。負けないで。貴方が背負っているものは確かに大きいし、人を殺した事がない私には分からないかもしれない。でも、それに押し潰されそうになっている貴方を見過ごせない！

少しでもいいから私に打ち明けてよ……。こんなに貴方の事を思っても、貴方は私に心配を掛けたくない！と何も言ってくれない！そんなのずるいよ！私は貴方を助けられないの？私は貴方が戻ってくると

信じている。ホイさん言ったでしょ？私に守られるんじゃないかって私を守ってくれるんでしょ…。」ときなこはそこまで語ると、言葉を失ってしまった。

その時、今まで全く反応がなかった凱歌の指がピクピクと反応した。

きなこはそれに驚き、凱歌の顔を見た。表情には大きな変化こそなかったが、瞳に僅かに光が見え隠れした。

「ホイさん！自分の心に負けないで！私が貴方を守ってあげるから！」ときなこが言った。

きなこの後ろで戦っていた禍悪主と”スナイパー・凱歌”は反応し始めた”人間・凱歌”に比例して”スナイパー・凱歌”が苦しみ始めた。

「あの女！殺してやる！」と”スナイパー・凱歌”は”ステアーAUG”を瞬時に作り出し、銃口を向けた。

禍悪主は素早く攻撃し引き金を引く隙を与えない様にしていたが、必死に向かってくる者の強さは通常以上の力を発揮するものである。

『しまった』と禍悪主が思った瞬間、”スナイパー・凱歌”が銃口をきなこに向け、引き金を引いた。

きなこがその音に気が付き振り返ると、禍悪主はきなこの目の前に居た。

その両腕を大きな盾に変えて。

「怪めないか。うっ…。」と禍悪主はきなこに訊いたが、苦しそうに声を詰らせ片膝を付いた。

「おのれ！だが、女を守る為に精神力を使い過ぎた様だな。もはや、これまでの様だな。」と

不敵な笑顔を浮かべながら”スナイパー・凱歌”が言った。

「冗談が過ぎるな。この程度で俺様がこれまでだと…。お前こそ自分が消える前に命乞いでもしたらどうだ？」と禍悪主が両腕を元に戻しながら立ち上がった。

「きなこが言ったな。このまま凱歌を正気に戻す為に話し掛け続けろ。お前の事は俺様が守ってやる。分かったな？」と振り返る事無く、禍悪主が言った。

「分かった。」ときなこは凱歌や龍牙とは全く逆の上からものを言うような言い方にムカッときつつ言う。

それを聞くと同時に、”スナイパー・凱歌”に向かって行った。きなこは更に凱歌に話し掛けていった。

「悪いが、もはや貴様に現実世界にある凱歌の肉体にすら影響が出なくなってきたんじゃないか？

今の貴様は単なる夜叉に過ぎない。これで思う存分攻撃が出来る！」と禍悪主は言い放つと

両手首から先を刃物に変え向かっていた。

”スナイパー・凱歌”はそれに対して回避しながら青龍刀を作り出し、禍悪主を右肩から真っ二つに切り裂いた。しかし、その攻撃を受けた瞬間、禍悪主の顔に笑みが表われ、姿が消えてしまった。

”スナイパー・凱歌”が周囲を見渡していると声が響いた。

「どこを見ている？俺様はここだ！」と禍悪主の声が聞こえると、”スナイパー・凱歌”の真上から両手を突き立て落ちてきた。慌てて青龍刀で防いだが、全体重が籠もった攻撃に弾き飛ばされてしまった。

その時、”スナイパー・凱歌”の体が歪み、声を上げ苦しみ出した。禍悪主がその姿にきなこの方を見た。

## ～第65章～＜覚醒＞

「ホイさん、もう時間がないみたい…。今まで言った事なかったね…。ホイさん、私…。

ホイさんの為ならこの命、神様に差し出せる。でも、ホイさんが人殺しに戻るって言うのなら、

私は貴方と刺し違えてでも止める。だからお願い…。元に戻って。」ときなこは言い終えると

静かに俯いた。その瞳からダイヤモンドのような美しい輝きを持った涙が凱歌の足元に落ちた。

きなこの心に無力さが広がり始めた時、弱々しい声が耳に入った。

慌てて上を向くと、凱歌の唇がゆっくりと動いた。

「きなこさん…。」とても弱くそばに居たきなこですら聞こえるか聞こえないかぐらいの声だったが、きなこは再び呼び掛けた。徐々に凱歌の瞳に光が戻ってきた。しかし、それに比例してきなこの体が揺らぎ始めた。ハッとしたかのような反応を見せた後、凱歌はしっかりと瞳できなこの顔を見つめた。「きなこさん！？ここはどこ？僕は一体…。」とはっきりとした声ではあったが状況が理解できていない凱歌がきなこに問い掛けた。

「良かったホイさん。元に戻ってくれて。でも、もう私には時間がないから説明出来ないけど、先に現実世界に戻っているから必ず戻って来てね。でないとただじゃ済まないからね。」ときなこは涙を拭いながら、強がる様に言った。きなこが言い終えた瞬間、きなこの体は光に包まれた。その光を呆然と凱歌が見ていると、静かに光が消えるとそこには苦しそうな表情でしゃがむ龍牙が居た。

「元に戻ったようなだな…。さすが命を預け合った仲だけあるな。ここの説明をした方がいいな。簡単に言うと、ここは君の心の中であり、あのそこに居る奴は夜叉。つまり君の心の闇が型を成した者。

君は奴に乗っ取られそうになったんだ。それを阻止する為に俺達がここに来たんだ。

あとはあいつを何とかするだけかな。」と龍牙は立ち上がりながら禍悪主の方を向いた。

「凱歌、やっと目覚めかい？遅かったじゃないか。龍牙、夜叉片付けちまうぞ！」と禍悪主が言った。

「凱歌はここに居て下さい。行きますか！」と声を上げると龍牙は走り出した。

禍悪主はもがき苦しむ”スナイパー・凱歌”、いやもはや人の形を保ちきれずに居る夜叉を睨みながら右手に意識を集中した。

「伊達に死神とは呼ばれてはいない。この紅き死神の大鎌が貴様に死を送り届けてやる。」と

禍悪主が言うと、禍悪主の右手に背丈以上の大鎌が現れた。

「生と死の使徒、黒帝龍牙がこの”黒牙”でお前を消し去る。」と龍牙も言うとその右手にこちらも”黒牙”と呼ばれる背丈以上はある大矛を持っていた。

苦しみながらも立ち上がった夜叉に無我夢中で二人に向かっていった。人の姿を失いつつある夜叉は禍悪主に向かって気功を使ってきた。龍牙はその攻撃方法の選別の正しさに内心舌を巻いてしまった。なぜなら禍悪主は気功を使えないと聞いていたからである。

龍牙は慌てて禍悪主を守る為に気を放とうとしたが禍悪主のあまりにも堂々とした態度にその動きを止めてしまった。禍悪主は何もする事無く、左手に大鎌を持ったまま立ち尽くしていた。

そして右手に気を貯め、夜叉が禍悪主に撃ち込んで来た。

しかし、禍悪主の周囲に壁があるかの様に近づく事が出来ずに吹き飛ばされた。

何事も無かったかの様というよりも何が起きたか分かっていないような表情で夜叉が飛ばされた方を向いた。

「今、何かしたか？」と自分が気壁を作り出し、弾き飛ばした事を分かっていなかった。

龍牙はその時に現れた自分を超える圧倒的な気の大きさに絶句してしまった。

『プロフェッサーが言っていた通りだ。俺の気は所詮、禍悪主が自分の中に使わずに収まり切らずに流れ出た気を利用しているに過ぎないんだ。じゃあ、なぜ自分の力しか信じず頼らない禍悪主はそれほど強大な力を使わないんだ？全く使った事がないのに無意識で気壁を発動するほど、才があるのに？』と龍牙は心の中で問い掛けた。そして、『試してみよう。』と決心した。

夜叉は吹き飛ばされ動揺したものの更に気を使い攻撃を仕掛けようとしてきた。

「禍悪主！”気”を使う相手には気を付ける！俺のする様にするんだ！」と龍牙は禍悪主に怒鳴った。

禍悪主は”気”という言葉に妙な反応をしたものの、その龍牙の真剣な表情に従う事にした。

龍牙は右手に気を纏い突っ込んで来る夜叉に向かって右手をかざした。

「禍悪主、自分の利き手をかざして相手を押さえ付けるイメージを合図したらしてくれ。」と龍牙は言った。

禍悪主は首を傾げながらも言う通りに左手をかざした。

「行くぞ。せーのー！」と龍牙が言った。その瞬間、夜叉が動きを止めた。

龍牙はその夜叉の動きを確認すると禍悪主の苦なく表情を見た。

『やはり禍悪主は気功術の天才だ。これはこの精神世界の力じゃない。これは気を発する初歩的な方法だがそれでも一人であの勢いで向かって来る気を使う相手を軽々と止められた。

間違いなく禍悪主はとんでもない逸材だ。でも、気に対して何かあるのか？』と龍牙は冷静に分析していた。そして龍牙は先程の気功術には一切気を発していなかった。

「禍悪主、そろそろ片を付けますか？」と龍牙は言った。

「言われなくとも望む所だ。」と禍悪主は言った。

龍牙は静かに気を放ち夜叉を吹き飛ばした。二人は顔を見合うと夜叉に向かい走り出した。

龍牙は「成敗！」と、禍悪主は「無に返れ！」と互いに武器を振るった。

禍悪主の大鎌は夜叉の首を、龍牙の”黒牙”は胴を切り裂いた。

夜叉は断末魔の叫びを上げ、人の形を失った。しかし消える事はなかった。

「俺は消えない…。俺は、俺は王凱歌になるんだ！そして人殺しを楽しんだ！」と煙のような姿になって猶も、夜叉は凱歌に向かって行った。

二人はその行動に一瞬慌ててが凱歌の方を向いた瞬間、その心配は消えてしまった。

凱歌は煙の様に形が定まらない夜叉に動じる事無く、夜叉を見つめていた。

「僕の心がこんな残忍で哀れな奴を生み出してしまった…。僕はもう逃げない。

自分が行なって来た事から、スナイパーだった自分から。」と凱歌が強い光を宿した瞳で

夜叉を見つめながら言った。凱歌の体が光り輝き、夜叉を取り込んでいった。

「やめろ～～！！消えたくない！俺がお前の中に消えても、またお前の前に現れる！

いつだってお前の隣に居るぞ！」と叫びを上げ、夜叉は消えた。

凱歌は力尽きたかの様に片膝を付いた。龍牙は右肩に”黒牙”を乗せながら、禍悪主は左肩に大鎌の柄を乗せながら、静かに凱歌の元に歩み寄った。

「よく己の闇を押し込めるのではなく、取り込む事が出来た。それが一番の解決法だった。

だが、人の心には常に闇が、夜叉が付き纏っている。それを忘れた時こそが、お前の最後となる。」

と禍悪主が冷静に言った。凱歌は禍悪主と龍牙を見て、今更ながら驚いていた。

「そうか。お前は俺様とちゃんと逢うのは、初めてだったな。俺様の名は、紅き死神・禍悪主。

このお人よしと、体を共有している同居人みたいなもんだ。」と片膝を付いている凱歌の目線に

合わせる様に大鎌を抱いたままじゃがみ、龍牙を時折睨む様に見ながら言った。

「そんな睨むなよ。確かにあんたと比べればお人よしかもしれないが…。」と龍牙は苦笑いを浮かべつつ言うと、凱歌に手を差し出し立たせた。

禍悪主は凱歌が立ち上がるのを待って、静かに立ち上がり、大鎌を持ち直すと「龍牙！」と大声で言った。驚いて龍牙が禍悪主の方を向いた。

「帰るぞ！俺様達がここに居る理由はもうない。長居している暇はない。

とはいえ、別にお前は帰って来なくてもいいぞ。」と禍悪主は最後に意地の悪い事を言った。

「どういう意味だよ！」と龍牙は背を向け歩き出していた禍悪主に問い掛けた。

「簡単な事だ。お前がいなければ体は、俺様一人のものになる。それだけの事だ。」と禍悪主は振り返る事無く言った。龍牙はすぐには禍悪主の跡を追わず、凱歌の方を向き直した。

「凱歌、あいつ。ああは言っているけど、誰かを助けるなんて事初めてだから照れてるんだよ。でも、君の為にこの危険な戦いに来てくれた。居なかったらきっと助けられなかった…。」

そうそう、折角の機会だからこの精神世界を見て回るといい。ここに来れる事はこの機会を逃したら二度となйと思うからな。時間を気にする事はない。ここでの1時間は現実世界の1分にも満たない。

じゃあ、俺はあいつを追い掛けないとまずいから。先に現実世界で待っているからな。」と龍牙は言うのと静かに禍悪主が進んで行った方に歩いて行った。

#### - 精神世界 -

丁度、龍牙達が凱歌から離れて行った頃、きなこは静かに目を開いた。

目の前には今なおも眠り続けている龍牙の体が目に入った。

慌てて周囲を見ると、プロフェッサー達が笑顔で見ている。

プロフェッサーはきなこの額などに付いている端末を丁寧に外した。

きなこが口を開こうとしたが、天山が何も言わなくていいという様に口の前に人差し指を立てていた。

きなこは静かにホイの顔を見た。そこにはとても穏やかな表情で横になっていた。

それを見て、全てが上手くいった事を理解した。

きなこは龍牙に感謝する様に握っていた左手を再度握り直した。

#### ～ 第66章 ～ < 思いと記憶 >

しばらく凱歌はその場にとどまり、龍牙達が進んでいた方を見ていた。

そんな時背後に気配を感じ、慌てて振り返った。そこには子供が居た。

「また逢えましたね、凱歌さん。」とその少年は優しい口調で言った。

「零君。どうしてここに？」と凱歌は不思議そうに言った。

「龍牙達と凱歌さんの間に道が出来ていたから、行き来は簡単だったんだ。でも、龍牙達が居たからすぐには姿を現せなくて…。この世界の事を一番よく知っているのだから、本当はすぐに助けに来れなくちゃ行けなかったのにごめんなさい。」と零は悔しそうに言った。

「いいんだよ。零君には零君の事情があるんだから。助けてくれようとしてくれただけで嬉しいよ。」と凱歌は少年の背丈しか持たない零の目線に合わせる様に膝を曲げながら優しく言った。

「やっぱり凱歌さんは優しいですね。じゃあ、助けに来れなかった代わりに、僕がここの事を教えてあげるよ。」と零は明るく言った。

「ここの事？」と凱歌が聞き返すと零は「この精神世界つまり心の間の事なら、僕に任せて！」と自信ありげに胸を叩いた。

「この精神世界というのは、この前僕と逢った心の間と同じなんだけど、作り主つまり主が違うんだ。前は龍牙達が主の世界だったんだ。でも、ここは凱歌さん、貴方が主の世界です。」

心の間というのは、様々な記憶、思いの集まる中心部の事であり、自我を司る所です。

そして、この部屋が今暗い感じなのは、さっきまで居た夜叉のせいなんだ。もう少ししたら明るくなると思う。今はよく見えないけど、この部屋は色々な部屋に繋がっているんだ。

それは様々なキーワードで分けられた記憶と思いの部屋なんだ。各扉に近づくとそのキーワードのようなものが伝わってくると思う。

その部屋を見る事で自分自身を、信念のようなものを再確認できると思うよ。もちろんその部屋の中には見たくない、思い出したくない事が詰った部屋もある。でも、それを敢えて見る事で”真に自分を見る事になる”と思う。ただ、心や思いはいくらでも変わってしまうものなんだ。

その時は辛い事でも後から思えばいい思い出になる事がある様に。

だから、見直すのはいい事だと思うよ。多分もうここに、自分の意志だけで来る事は出来ないと思う。

龍牙が言っていたけど、ここでの時間は外とはまるで違う。

凱歌さんの思い一つで長くもなるし、短くもなる。だってここは、簡単に言えば夢の世界みたいな感じだから。

この世界なら空を飛ぶ事も、手を剣に変える事も出来る。思い一つで何でも出来る世界なんだ。説明はこんなもんかな。後は凱歌さん次第だよ。僕もそろそろ行かないと。あの二人を見てないとまずいから。それじゃあ。また逢えて嬉しかった。さようなら！」と零は凱歌に挨拶を済ませると龍牙達が進んでいた方へ走って行った。それを凱歌は手を振りながら見送った。

凱歌から見えなくなった所で零は急に足を止めた。

そこには大鎌を肩に掛け壁のようなものに身を預け、何かを待っているかのような禍悪主が居た。

零は予想外だった事と凱歌に会えた事で浮かれ油断した事を後悔した。

「そんなに俺様と会った事がまずかったか？俺様達の監視官にして心の番人、零よ。」とまるで前から知っているかのような雰囲気では禍悪主は言った。

「僕の事を知っていたの？」と零は意を決め、訊いた。

「ああ。随分前から気が付いてはいたが、見たのは今が初めてだ。こんなガキの姿をしているとは思わなかったがな。あのお人よしは気が付いてはいないだろうがな。

第一、気付かないはずがないだろうが。今、精神世界に生きている俺様が。」と冷静に禍悪主は答えた。

「僕をどうする気？君達を監視する僕を消すの？」と零は冷眼の禍悪主に負けず劣らず強い眼差しを向け言った。

「そんな事をしたら、俺様の身が危ないだろうが。

第一、貴様を消した所で何も変わらん。それにそんな気があったら、話す前にこの大鎌で切っている。

単に探し物をしているだけだ。それが済むまでは邪魔をして欲しくないと思ってな。」と真剣な眼差しで禍悪主は言った。

「探し物？凱歌さんの心の中で？」と怪しむような視線を禍悪主に向けながら言った。

「そうだ。凱歌の心に用がある。別に破壊するつもりはない。わざわざ命懸けで助けた相手を殺すほど腐ってはいない。俺様は凱歌って奴に興味がある。これだけ色々な事があり、あれだけ強い夜叉を作り出す奴がな。」と考え深げな表情で禍悪主は言った。

その言葉と表情、そして長年二人を見てきた番人としての零の勘が何かを感じた。

「分かりました。貴方がそこまで興味を持つなんて珍しいですからね。それに今の貴方には本当に知りたいという気持ちしかないみたいですから。僕は貴方を信じます。貴方も僕を信じてくれますか？」と零は笑顔で禍悪主に問い掛けた。

「ああ。長年俺様達を、良い方向へと導こうとしてきたんだろ？信じるさ。」と禍悪主は笑顔まではいかないものの微笑を浮かべて言った。

「それでは、貴方が帰ってくるまで待っています。でもあんまり長居はしないで下さいね。

凱歌や僕達に影響が出てしまいますから。」と零はもう歩き出していた禍悪主に優しく言う。  
言い終えると禍悪主とは反対の外へ続く道を進んで行った。

凱歌は零と別れてから、零の説明を整理しながらいくつかの扉に入った。初めは、父と祖父の思いで  
だった。とても幼かったので曖昧な部分はあったが、体調のいい時に料理を作ってくれた父の背中など、  
楽しい思い出だった。次の扉は、分かれる前の幸せな時の母との思い出だった。

そこにはオルガンで”アヴェ・マリア”を引く母。優しく自分を抱いてくれる母。

その時、母とは違う女性が自分を慈しむ様に見つめ、自分を抱く記憶。そしてその赤子の自分を  
嬉しそうに見る幼い男の子の姿が現れた。

今の今まで忘れていた物心つく前の赤子の時の記憶だった。

しかし、その女性に妙に強い親近感を覚えた。そして、その女性が誰かに似ているような気がした。

でも、誰かは分からなかった…。

凱歌が部屋を出ると、零の言った言葉を思い出した。

『記憶というのは決して消える事がない。ただ思い出しづらくなっているだけなんだ。』と零が走り出して  
すぐに振り返って言った言葉だった。

次の扉に近づいた瞬間、後退りしてしまった。

「何だよ。人生の大半を占めている出来事の部屋じゃないか。それともこれだけは避けたいのか？」と  
いう見下すような声が聞こえた。凱歌が扉の横を見るとそこには、もう一人の凱歌が扉の横の壁に寄り  
掛かる様に立っていた。それは夜叉であった。

夜叉は凱歌が気付いたのを確認すると寄り掛かるのをやめ、凱歌の隣に立つと扉を見つめた。

「心配しなさんな。もう俺にあんたを乗っ取るほど力はないし、する気もない。無駄だと  
分かったからな。」と夜叉は凱歌に言った。しかし、凱歌は気を許す事無く睨み付けていた。

「形を失ったはずの俺がこうしてまた、あんたの前に現れた理由を知りたそうだな。

答えは非常に簡単だ。ここが俺の生まれた場所だからだよ。そのお陰で力が一時的に増したただけだ。  
もうじき、またあんたの一部に戻ってしまうがね。」と夜叉は淡々と説明した。

そう言うとき夜叉は凱歌と体を重ねると消えてしまった。しかし、声だけは聞こえていた。

『さっさと見ちまった方がいい。これ以上の苦しみはないからな。』と耳で聞くのではなく、  
頭に直接伝わるような感じだった。凱歌は覚悟を決め、扉に手を掛けようと手を伸ばした。

その時、扉が独りでに開いた。驚いて中を見てみると、そこに禍悪主が居た。

入ってきた凱歌に気付いたものの前を向いたまま、口を開いた。

「勝手にお前の記憶と思いを見させてもらった。なかなか面白い人生だな。才能と権力に翻弄されて  
ばかりの人生だ。やはり俺様に興味を持っただけある。君には今後も注目させてもらう。

君なら、俺様を変えてくれるかもしれない…。」と最後見た事がないような暗い部分が籠もった声で  
言った後、部屋の外へと出て行った。その後ろ姿を凱歌は見た瞬間、禍悪主の苦しみを見たような  
気がした。凱歌は気を取り直し、部屋の奥へと進んでいた。そしてこの部屋はスナイパーとして記憶の  
部屋だった。

見えてくるのは今まで自分が殺した人々に関する情報や、スコープから見えるターゲットの姿。  
そして撃たれ倒れる姿が走馬灯の様に駆け巡った。その時の思い、苦しみが胸に流れ込んできた。  
その中に一瞬の優越感、快感を持っていた事も感じた。そしてそれを嫌う自分が居る事も。

”母を捜す、見つけ出す”。これを言い訳にしていって人殺しをする自分に気が付いて、

嫌悪感を感じていた事も。

『その思い、その考えが俺を作り育てた。でも、今のあんたはそれを力にする事が出来るはずだ。』

と夜叉は自分の存在が消える事を望むかの様に言った。

「お前は一体何を望んでいるんだ？」と辛い大量の記憶、思いに苦しみながら凱歌は夜叉に訊いた。

『俺が望むもの？それは自由さ！だかそれと同時に俺はあんただ。あんたが自分を理解し強くなるのも望みかな。』と夜叉は口にした。

『自分を理解し強くなる』…。それは心の闇を理解する、夜叉が完全に消える事を意味している事に凱歌は気付いた。

夜叉は自らの消滅を真に望んでいた。しかしそれを直接、口にする事が出来なかった。

そして、凱歌は自分のしてきた事を直視し受け入れ始めた。

凱歌が部屋を出る頃には夜叉は完全に姿を消していた。それは夜叉の望みが叶えられた瞬間だったのかもしれない。その後も様々な部屋を見て回った。

#### - 現実世界 -

凱歌がスナイパーの部屋を出た頃、龍牙が意識を取り戻しかけていた。

きなこがそれに初めに気が付き、プロフェッサー達を呼んだ。

プロフェッサー達が駆け寄って来た時、龍牙が目を開けた。

焦点の定まらない感じの目できなこを見ると微笑み、右手でVサインをして見せた。

そしてプロフェッサー達に笑顔を見せた。その後、龍牙はある事に気付きに驚いた。

「きなこさん。もしかしてずっと俺の手を握ってたのか！？」と龍牙は動揺しながら訊いた。

「えっはい。中に入ってからずっと。」と淡々ときなこは答えた。

「それは俺じゃなくて、隣で寝ている人にしてやるべきだ。」と言い、龍牙は凱歌の左手ときなこの手を繋げた。きなこは驚きつつ、龍牙の言葉に従い、凱歌の隣に座り手を握った。

龍牙はそれを確認すると起き上がろうとした。

「龍牙！まだ起き上がるな。ケーブルがまだ繋がっているし、念の為に凱歌が起きるまでそのままにいる。」とプロフェッサーが言った。

『えっ！めんどくさい。』という顔したものの龍牙は再び横になった。

そして凱歌が目覚めるのをただ待っていた。

#### - 精神世界 -

凱歌は最近の出来事の部屋を巡っていた。

一つ前には円道寺家のみんなとの思い出の部屋だった。

家族の素晴らしさを実感し、『きなこと…。』という考えまで浮かんでしまった。

気を改め、最後の扉の前に立った。その時、左手に不思議な感覚が起きた。

しかしその感覚は不快ではなく、優しい思いが伝わってきた。

凱歌はその扉からは嫌な感覚は無く、近く居るだけで幸せな気持ちになった。

すぐにこの部屋が何の部屋が分かった。

静かに扉を開けるとそこには、自分が今もっとも大切に思っている人との記憶、思いが詰っていた。それは知っての通り、円道寺きなこに関するものだった。

それを見ていると、きなこと初めて戦った時の記憶が現れた。

それを見ながら、自分が追い掛けていたスナイパーだと判り、仕方が無く戦わなければならなかった  
きなこの気持ちを思った。追っているスナイパーだと判っただけで辛いというのに、それにも増して  
戦わなければならなかったきなこの気持ちが痛いほど分かった。それは自分も似たようなものだったから  
である。そして全てを見終え、部屋を出ると凱歌の体は強い光に包まれた。  
凱歌は右手で目を覆ったがあまりの眩しさに目を閉じた。

～第67章～ <遠しき記憶の女性>

- 現実世界 -

龍冴が目を覚ましてから5分も経たない内に龍冴が突然口を開いた。

「凱歌が戻ってくるぞ。準備しておけ。」と龍冴は言い出した。

突然の事に全員呆然としてしまったが、蒼凱は「あっそうか!」と言い出した。

理解が出来ていない三人は蒼凱に訊いた。

「今、龍冴は凱歌さんと繋がったままなので、凱歌さんの意識を感じられるんですよ。それで、  
目覚めるのを感じたんだと思います。」と蒼凱が説明した。

龍冴は「そうそう。」と淡々と言った。

そんな話をしていると、凱歌が意識を取り戻しそうとしていた。凱歌は静かに目を開けた。

凱歌の視界に初めに飛び込んで来たのは、きなこの安堵の表情だった。

次の目に入ったのは、きなこの後ろに立つ蒼凱と天山だった。その表情の安心した様だった。

プロフェッサーは静かに凱歌の頭部に付けられた端末を取っていた。その顔も安堵の表情だった。

最後にケーブルを抜いた龍冴が上半身を起こしながら、凱歌に声を掛けた。

「お帰り、凱歌。無事で良かった。」と身内を心配するような表情だった。

凱歌はその龍冴の表情を見た瞬間、母の記憶の部屋で見た謎の女性が誰に似ていたかを分かった。

それは龍冴だったのだ。その女性が何者なのか知りたいと強く思った。だがほとんど分からないのに

龍冴に訊くべきか悩んだ。龍冴は呆然と自分をいつもとは違う雰囲気で見ているの凱歌に、

声も掛けられず見つめていた。その光景は不思議な光景だった。男同士が見詰め合っているのである。

きなこ達はその異様な光景をただ見ているだけだった。とても話し掛けられる雰囲気ではなかった。

凱歌は龍冴の顔を見つめながら考え込み、龍冴は凱歌の顔を見つめ、何を考えているのかを探ろう  
としている様に見えた。

しばらくすると、凱歌は龍冴から視界を反らした。

龍冴はその姿を見ると、不思議そうに首を傾げ静かに立ち上がりズボンの汚れを払った。

「俺に聞きたい事があったら、ためらう事無く何でも訊け。相談しろ。」

こんな事を言うのもなんだが、俺はここに居る中で一番、君と似た経験を持っているからな。」

と少し寂しげな声で龍冴は言うのと部屋を出て行った。

その後ろ姿は、子供から悩みを打ち明けてくれない事に悩む父の後ろ姿のような寂しさがあった。

凱歌はその龍冴の姿に、『どうして訊かなかったんだろう?』とってしまった。

部屋を出た龍冴は「凱歌は気付き始めたか……。下手な事、してられないな……。」と壁に頭を付け  
俯くと、思い詰めた表情で呟いた。

- 続く